

「悔」

なれど

「忍」



—— 吉田松陰のろうあ弟 ——

杉敏三郎 考



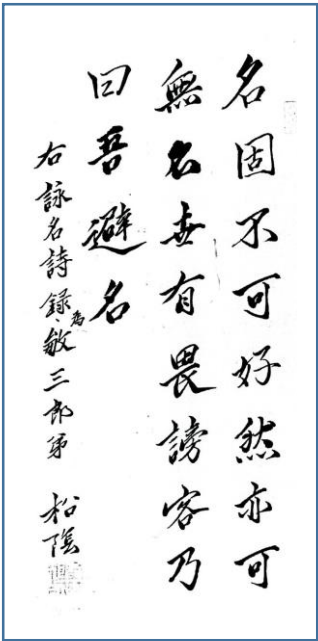
[表紙の絵：兄吉田松陰が弟敏三郎を抱き寄せる場面]

明治 42 年大阪朝日新聞連載の渡辺霞亭(碧瑠璃園)著「吉田松陰」の挿絵から。

「解題」より

平成二十七年NHKテレビ大河ドラマ「花燃ゆ」は、吉田松陰の妹杉文(ふみ)がヒロインの物語である。大島里美、宮村優子の二人の脚本家による創作ドラマである。その中でこれまであまり知られていなかった弟杉敏三郎についても姉文(ふみ)の周辺でその存在と周囲への関わりとが取り上げられている。

敏三郎と旧知だった長谷川いね子氏(乃木希典將軍の妹、敏三郎の親戚筋)が「お兄さんの民治さんにも劣らぬ賢い人だった……。松陰先生にも勝るやうな……。…」と証言しているほどの俊才だったようである。しかし、目の前で練り広げられる尊王攘夷、倒幕、維新の激変に際して、ろうあ者の身のために、武家の男子でありながら、貢献できずただ眺めているしかなかった杉敏三郎だっただろう。その胸の内は「悔」の一念でいっぱいであったと推察する。兄吉田松陰の松下村塾を中心に高杉晋作や久坂玄瑞らが至誠を貫いて勇ましく、華々しく活躍するのに対して自分の無力さに歯ざしりしたい思いであったに違いない。



〔吉田松陰が安政六年江戸に送られることになった時に、

弟杉敏三郎に送った漢詩 無名の生き方を説いている。〕

〔維新の先覚吉田松陰〕より。原本は山口県文書館蔵)

兄吉田松陰が野山獄に再入獄する際、松下村塾生たちとの寄せ書きで敏三郎は「悔」と一字をしたためた。(敏三郎十四歳の時)

この一字が敏三郎の遺した唯一の文字にして、言葉であった。そして、兄吉田松陰から諭された生き方は「堪忍」にはかならなかった。ろうあ武士杉敏三郎の人生は「悔」なれど「忍」の連続であり、一言で言えば、「悔しいけれど耐え忍ばざるを得なかった」一生だったと推考する。

歴史上記録に残る最初の生来性ろうあ者であり、唯一の「ろうあ武士」であった。

[発行] 2015年12月31日

[著者] 市橋詮司(イチハシサトシ)

- 一 兄吉田松陰について
 - 二 杉敏三郎の時代と舞台、家庭環境
 - 三 杉敏三郎とはどんな人か
 - 四 敏三郎の耳と病氣
 - 五 敏三郎のコミュニケーションと言語
 - 六 敏三郎と兄松陰
 - 七 清正公への禱り(藁にも縋る思いの松陰)
 - 八 松陰と手話、ろうあ(聾啞)教育
 - 九 敏三郎の生き方と思いについての推考
 - 十 志士たちと敏三郎
 - 十一 明治期の敏三郎
 - 十二 山尾庸三と聴覚障がい教育の原点―萩
- 追考 一 NHK大河ドラマ「花燃ゆ」(平成二十七年)での敏三郎
- 二 仮説
- 結び(推考)

兄松陰との別れに臨んで敏三郎が書いた「悔」の字。(寄せ書きから)(「維新の先覚吉田松陰」より。原本の軸は山口県文書館蔵)



(A5判 263 ページ、ソフトカバー)

敏三郎の容貌は瓜二つと言われるぐらい兄吉田松陰に酷似していたとのことである。兄吉田松陰は、弟の敏三郎の耳とことばとを何とかしようといろいろと手立てを考えたがどうすることもできないまま刑場の露と消えた。ペリーの船でアメリカへ密航しようとしたのも欧米の聾啞院やろうあ児の指導法を見聞しなかったからとも思われる。

松陰は「一視同仁」という平等主義を取り入れ、松下村塾でも、障がいのある者もない者も差別をしないことや聾啞院(ろうあ学校)や貧院などを設置する民政の重要性を説いていた。

◎敏三郎は兄松陰との別れに際し、「悔」の字を書き遺した。松陰はいつも弟敏三郎のことを心に留め、「怒るな」「堪忍」を敏三郎に説諭した。

◎敏三郎は、史料、写真に残る唯一の「ろうあ武士」である。

◎松陰は「聾啞院」設置を夢見ていた。

◎敏三郎は日本のろうあ教育の源流の最初の一滴であり、源流となった谷は萩の松下村塾である。

◎敏三郎・松陰・山尾庸三の絆で「聾啞院」(ろうあ学校・築地訓盲院)設置の流れとなっていた。



「書を認(した)める杉敏三郎」

明治42年大阪朝日新聞連載の渡辺霞亭(碧瑠璃園)著「吉田松陰」の挿絵から。

本書では、杉敏三郎に関するかなり集約し、それらを元に推考したつもりである。大河ドラマ「花燃ゆ」で描かれている敏三郎、江戸幕末のろうあ者の生活、行動、立ち位置などについて史実との乖離を示して、障がいの歴史に対する誤解の防止に役立てたい。

本書発行の目的は、江戸時代末期から明治時代にかけての一人のろうあ者の生きた足跡から、当時のろうあ者をめぐる状況を探り、分かったことを関心のある方々に知ってもらうためである。特に、聴覚障がい関係者には当時のろうあ者の正しい姿をとらえてもらいたい。営利目的の一般書籍ではなく、私家版として作成し、必要とされる方には頒布したい。